

# 草の根から 世界は変わる



岸本 聡子 ②

## ワクチンを巡る不平等

型コロナワクチンの生産と販売を独占的に支配しているからだ。知的財産権という国際的なルールが特許を保護し、世界各地でワクチンを生産することを許さない。各国が公的資金を大目につぎ込んで開発したワクチンにもかかわらず、特許は製薬会社にあるため、また公費をつぎ込んで企業からワクチンを購入するという「あべこべ」がまかり通っている。そしてほとんどの国が「あべこべ競争」になさずも参加させてもらえない。

世界的な公衆衛生の危機下で、新型コロナウイルスのワクチン、治療薬、検査法など医療ツールにおいては、コロナ危機が終わるまで一時的に特許を放棄することを求める世界

的世論が、ここ半年でどんどん大きくなっていった。このことについて話し合う世界貿易機関(WTO)では、インドや南アフリカのリーダーシップで61カ国が共同提案し、現在100カ国以上で支持されている。多くの国際機関、市民組織、医師、介護・医療従事者の労働組合、有識者などが粘り強く各国政府に要求し、署名運動した。「みんなが安全でなければ、誰も安全ではない」というスローガンでグローバルにつながった。

そして、「歴史を変える変化」が起きた。変化を促すところから完全に主観的なものなので、私の目から見た歴史的变化だ。コロナ特定の知的財産権の一時的停止に

## 米の「歴史的变化」歓迎

反対してきたのは、米国のEJLを筆頭に、英国、ノルウェー、スイス、日本、オーストラリアといった一握りの先進国とフランスだが、製薬会社の既得権益の中核である米国が、先の交渉で特許の一時的停止に賛成したというのだ。このニュースは世界中を驚かせた。私も驚愕し、狂喜した一人だ。バイデン政権に変わらなければありえなかった。

私が知る過去25年間で、米国については国際政治で自分勝手な振る舞いを続けてきたという記憶しかない。節を重ねるにつれ、大国のエゴ中心の国際政治は結局は変わらなことが常と、やり過ごすことに慣れていった。今回もそうだと感じていた。しかし、歴史は動いた。

新型コロナウイルスは、独占企業が技術を囲い込み、希少性を意図的に作り出すことで、価格や条件の交渉の美権をにぎり、膨大な利益を上げるという仕組みを自らの下にさらした。これは突然始まったことでもコロナに限ったことでもない。約20年前、エイズがおびただしい人命を奪ったのは、特許でガチガチだった治療薬が1人当たり100万〜200万円もしたからだ。この状況を打ち破ったのも、途上国政府と運動したグローバルな民衆運動だった。

今まさにインドで1日40万人が感染し、3千人が亡くなっている。悲惨な状況に皆胸を痛めている。特許停止が必要なのはワクチンだけではない。米国の支持や国際交渉がワクチンのみに集中しがちな中で、国際的な市民運動はワクチンも治療薬も医療器置も「グローバルな公共財」として広いアクセスを求める。

私は小さな声の集合が変化を起こすと信じている。

〈国際NGO研究員〉  
〈第4日曜日に掲載します〉

## 思索の ノート

どうしてそうなっているかといまは片手で数えられるだけの大手製薬会社が、新

自分の国だけを守ったってウイルスは国境を簡単に越えるので、結局は戻ってくる。パンデミックはお金や国境の論理でなく、協力を通ずって対処しなくてはならない課題であることは明確だ。でもその正反対にならなくてはならない。